

黒田夏子の『a bさんご』を読んだ。とりあえず「横書きが  
つらかった」。

ぼくはネットに書かれている横書きの文章を読めない（読んでいてもまったく頭にはいってこない）ので、縦書きに直している。また、モニター上の文字も頭にはいってこないのでプリントアウトして読んでいるアナクロ人間である。そんなぼくに横書きの文章はつらかった。まさか縦書きに直して読むわけにもいかなかったので根気よく読んだ。

第一印象。世間でいわれているような実験小説とか前衛小説とか、というような印象はなく、普通の小説だった。横書きとか、平仮名書きとか、固有名詞を定義し直すとか、そういう作業がおこなわれていて、それら「黒田夏子という現場」に立ち合うことが求められている作品で、実験とか前衛とかいう抽象的で鋭利的で背反的な方法論とは無縁なところにあった。実際、非常にオーソドックスな話をオーソドックスな枠組みの中で展開していて、物語として破綻のない終始だった。

ぼくはこういう粘着質な文体、もってまわった表現、などは少々苦手なのだが、予定調和的な名詞や形容詞を使わず、あくまでも「黒田夏子の現場」が創り出すイメージの世界を楽しむことができるかどうか、そのことだけがこの作品の在り方だとおもった。だから、そんなに「すごい」というほどの小説でもなかった。ぼくはもつと別なものに興味がある。

樋口武二さんは新しい詩集『異譚集』（書肆山住）の「蛇足にて候（あとがきにかえて）」のなかで、「長い間、『物語性』にこ

だわってきた。それに固執するあまり、リアリティや、表現に、いささかの瑕疵が見られるのと、冗長であるという欠点、これは、まさに工夫が足りないということかも知れない。だが『日常性』という部分に物語の根をおきたいと考えているので、これらの欠点も、敢えて晒すこととした」と書いている。

この一冊は、言葉の体験というよりも、樋口さんの（一見、無意識に見える）思考を楽しむことで、樋口さんの世界が読者の懐に広がっていくしかけがほどこされている。  
集中から「規範」を引用させていただく。

その村では 若者が年頃になると 必ずといっていいほどに 隣近所の眼がうるさくなる 他郷の女を娶るということが その村では 禁忌されていて それを犯した者は 村のはずれの ちよんがい淵に 吊り下げられるという とんでもない掟があつて 若者どころか良い歳をした男たちまでもが それが怖さに 外には遊びに出ないでいるのだ 一年に一度 だけ そんな男衆のために嫁とりがおこなわれる 隣村から 選ばれてきた姫と呼ばれる娘を巡って 米俵を背負った男たちが 短距離競走よろしく 冬枯れの田圃を走るののである 勝者は常にひとりだけだから 敗者ばかりの村になり 男たちの夢は 他郷の娘に注がれる だから いつも ちよんがい淵には 男がすずなりである 淵の中段までせり出して 大きな桑の木が生えていて その山桑の枝に 他郷で所帯をもった男たちが 老人たちの手で つり下げられるのである どう逃げたところで 村の老人たちの眼は逃れられないと見

そして、村は いつも老人たちの夢のなかにあつた

若者たちは、村を治めている孤独な老人たちとそれに同調する孤独な年配者たちに捕らわれ、ちよんがい淵に吊されてしまふ。そして「吊されたままで 男たちは歳をとり やがては黄昏のように落ちていく」のだ。そんな声を聞きながら村の若者たちは一年に一度の嫁取りにわずかな希望を託すしかなかった。そしてこの異譚話は「そして、村は いつも老人たちの夢のなかにあつた」と終わる。

人はだれにも縛られず、自分の望むままに自由に生きたいと願っているが、そんな願いはかなえられず、常に、所属する集団の規範にその自由を規制されている。もつとも制限されているとはいえ、人々は、集団の規律や慣習、風習、文化に制限されて生きていることをみずから望んでいる節がないでもない。そのほうが生きるのに楽だからである。だから、米俵を背負って嫁取りをめざすなどといった「村の文化」（時代を経て、現在では「郷土芸能」とかといって、年に一度、村民が村に帰郷する日に催される制度として存続している）のなかに組み込まれている。ときとして自分に利が与えられなかった、ということ、けつして、自由でありたいとかいう理由ではなく、ただ、嫁取りができないという理由で村の規範に逆らう者が出るが、それらが捕らえられるのは理である。とはいってもここに規範は老人たちのつくった、老人たちの権威と、かれらの制度を全うするためだけの偏狭な規範でしかない。若者たちはそれにのみこまれて死んでいく。

え 村から消えた男たちは 互いの消息を 木の枝の先で知ることになるのだつた 縛りながら 老人たちは泣いた なぜ この村を捨てたのかとさめざめと泣いた そして縛られた男たちは 二度とほかれることはなかった それを傍目に見ながら 若者たちは思った 今年の冬に勝てなかつたら 俺は 隣村に行って 懇ろになつた娘と 手を取り合つて あの老人たちの手が届かないような 遠方の地で しずかな生活を築いてみせようと 誰もが そう思っていた

その村には 娘が ほとんどといていいほど居なかつたのである なぜなら その村で所帯をもつ者があまりおらず多くの女たちは 連れ戻された者の妻であつた 村を治めているのは 孤独な老人たちと それに同調する孤独な年配者である 若者の多くは 早く村を出たいと思つてはいるが なかなかそのチャンスは まわつてはこなかつたのだ ちよんがい淵では 今日も誰かの落ちる音がする 木には 鈴なりの男たちがざわめいて 枝はたわんで揺れている 力がつきて淵に落ちていくのは いつも歳をとつた男たち 今日も誰かが落ちていく パシヤという音のたびに 時間が止まる その一瞬だけ静寂が あたりに訪れる 吊されたままで 男たちは歳をとり やがては黄昏のように落ちていくのだつた 今日も ひっきりなしに 男たちの あわあ、あわあという声が 風に乗つて 聞こえてくる それを耳にしながら 女たちも歳を重ね 若者たちは 自らの夢に地のような眩しさを混ぜるので 一年に一度の嫁取りにわずかな希望を託して。

また、老人という権力者はみずからの力だけで影響力を行使できるわけではない。そこには若者たちの権力への依存、秩序への依存、といった潜在意識がはたらき、「吊されたままで歳をとる」ことを選んでしまっている。いかえれば、老人が権力をもっていることを了承することで若者たちはみずからの生存をかれらに寄生しているといってもいいだろう。

この異譚集にはそんな権力と規範に取り込まれていく人の姿がさまざまな装いをして描かれている。樋口さんは制度や慣習、風習などからめとられて人々の悲喜こもごもの生息をこの一冊に描いている。いろんな読みができておもしろい一冊だった。

ぼくは社会人類学者レイヴンストロースにももの考え方の方を本を教えてもらった。そのレイヴンストロースは、多様な文化・多様な文明といい、どのような民族も民族独自の構造を持つとあって、西洋中心主義のサルトルを痛烈に批判した。そして現在、レイヴンストロースを中心とする構造主義的なものの考え方が世間では一般的になっている。

構造主義といってもむつかしいものではない。すごく簡単にいってしまうと、ぼくらは自分の考え方で生きているとおもっているが、「ぼくの考え」は、いま生きている世間の文化や風習、規約などに制限されている、そんなに自分だけの考えで生きていくわけじゃないよ、という考え方だ。いってみれば、自分のオリジナリティなんてふりかざしたってダメだよ、ということ

だとしたらせめて、外食産業が目先の利益だけ追求せずに、「日本の食を守る」というかれらの大好きな「スローガン」世間受けする戦略」を前面に押し出せば、日本の農家はものすごく助かるとおもう。しかし、安い農産物が入ってくれば、外食産業はこぞって利益を追求するために、国産の農産物などふりむきもしないだろう。かれらは日本という国で、日本人を相手に食をふるまうという矜持よりも利益を追求する集団でしかないとぼくは勝手におもっているのだが、間違っているだろうか。「日本の食を守る」ではなく、「消費者の皆さんに安くておいしいものを」というキャッチフレーズを前面に押し出して、利潤をあげる、そのことが最優先されるだろう。利潤を生まない企業は企業ではない、としても、程加減があるだろうとおもうのは、一度も会社勤めをしたことのないぼくが経済音痴ぶりをふりかざしているだけかもしれないが、最近の「儲け組」のはしゃぎっぷりはどうも気に入らないのだが。

そういうわけで「ワタミ」の渡辺美樹さん、政府のなんとかなんか審議会にも参加して、日本の行く末を協議したりもしている渡辺美樹さん、あなたが全国展開している宅食事業、たとえ安い農産物が入ってきても、遺伝子を操作して害虫駆除されたり、成長促進剤の化学物質で大量生産された輸入農産物ではなく、日本人が農薬を控えて（あるいは、使用せず）作った農産物を、日本経済のために、日本の農家のために、そして日本の消費者のために使ってもらえるだろうか。

とはいっても（と、少々弱気になるのだが）朝マックとかいっ

でもある。

TPPが新聞やTV画面で賑わっているいま、いつもレイヴンストロースのことがおもしろいおこされる。TPPとは多様な文化、多様な文明、多様な構造を壊す契約ではないかとおもってしまう。

とはいってもぼくにTPPの詳細がよくわかっていないわけでもないが、なんとなく、行け行けドンドン、といったグローバルズムが日本の経済を成長させ、日本人の生活を豊かにさせると、そんな幻想が見え隠れしている、とおもっているのはぼくだけだろうか。

いま、とくに話題になっているのは農産物で、安い農産物が関税なしで輸入されると国内の農業は全滅するといっているのだが、非常に簡単な方法、日本の農業が全滅しない簡単な方法は、もし、外国産の安い農産物が入ってきたとしても、消費者が国内産の農産物を買えばなんの問題もおこらない。安い農産物が店頭には並べられても国産品を買えばいいだけのことである。そう考えれば、国産農産物を守ることはそんなにむづかしいことだろうか、とおもってしまうのだが、いやいや、安い農産物が店頭には並べば、安い方が伸びるのは消費者心理としてはしかたのないことかもしれない。食料品は毎日のことだから、国産品は味が良くて安心だといっても、そうそう毎日高い食料品（輸入品と比べてのことだが）を買えやしない、毎日の生活をやりくりしている主婦は一円だって安い物を買っているのだ、と反論されるだろう。

て、若い人たちがマクドナルドのハンバーガーで朝食をとるというTVCMが流れていて、食のグローバル化はぼくのような年寄りの一固執主義をすっかり凌駕して、日本の食に当たり前のよう展開されている現状がある。フライドチキンとかピザとか、日本人の食卓に普通に入り込んできている。それらはいまさら、グローバル化はダメだ、と排除できるようなものでもないことは十二分に承知している。

日本には日本基準の農薬など生産にかんする決まり事がある。他の国とは違う決まり事がある。それが反古にされた農産物が輸入されてくる。あるいは、医療や環境や労働など、日本独自の決まり事がある。そういう決まり事とは別な決まり事のルールに統一される。グローバルズムとはそういう契約下で生活をすることを決意することだ、などといってみるところで、まだなにもはじまっていないのに、それを実感したふりをして、それについて考えようではないか、という提案をしたところで、なにがなんだかわかりえようもないことかもしれない。それにぼくは、どうせこの文明は滅びるのだ、とホラを吹いている。だったら、いま、この文明が減びようとしている道を行くのに、それを「日本人としてのあるべき道」などとぼくのもっとも嫌いな言い分に押し返そうとしているような発言をしていて、ちよつとすることが、あつちこつちしていないか、と自分でもおもっている。

本誌「space」ところの誌名の由来はぼくが宇宙好きなせい

「宇宙」という意味でとられているのだが、そのことよりも「余白」を意味している。

「書かれなかったこと」である。  
西洋画はキャンバス全体に絵の具を塗りたくっている。翻つて、日本画（中国由来のものではあるのだが）は余白の美がある。書かれなかった部分をも含めて一幅の絵画としての美がある。西洋画のように絵の具で埋めつくすという文化とは違うのだ。

なにもかも関税を撤廃して、グローバルゼーションの名のもとに、環太平洋の国々は同じ価値観をもとうじゃないか、というTPPは、レヴィIIストロースのいう多様な文化、多様な文明、多様な構造を西洋側の構造にあてはめることではないか。あるいは、サルトルのいう主体編重主義にたいして、レヴィIIストロースは多様な共同体間での相対的な関係を言い募ったのだが、いま、TPPにたいしてレヴィIIストロースの批判がそっくりあてはまるのではないかとおもう。

もともとレヴィIIストロースが「調査・研究」のために入り込んだ未開地は、レヴィIIストロースという文明と文化におかされ、新しい文明の甘い香りを吸って、自分たちの文明や文化の後進性を認識し、新しい文明の毒と蜜に溺れていく運命をたどった。古い文明は新しい文明に凌駕される運命を持っているかもしれない。それは古い文明の住民の意思による後押しがあったからだろうとおもう。文明とはそうして、内部から自壊していく。

TPPも困った問題だが、あと何年かにやってくるといわれている南海沖地震も困った問題である。TPPは多少なりとも応対のしかたがあるのだが、自然災害はどう防ぎようもない。だから、地震がきたら逃げる、それだけである。が、この狭い高知県、逃げる場所がない。いや、逃げる時間がない。

今朝の高知新聞に南海トラフで巨大地震が起きたらライフラインは壊滅で、被害額は県内総生産2兆円の5年分にもものほり、最大56万人の避難者が発生する、と載っていた。まあ、最大被害を想定してのことだが、それでも高知県の人口は76万人ぐらだからえらいこっちゃ、とびっくりした。

そんな高知の不安につけるかのように、中四国防衛局長が高知県庁を訪れて、県知事に「自衛隊のカウンターパートである米軍の活用の仕方、演習、訓練をしていかなんといけないか」と思っている。震度6であれば、要請があるうがなかるうが現地に向かつて部隊が走りだすスタイル。そういうシステムの中に何となく米軍も取り入れるような方向で、いろいろな検討を進めたい」と発言して、県知事もおおよそ了解した、と高知新聞に載っていた。

まあ、県知事としては県民の難儀をどう救うのか、そのことが課題だろうから、しかたないだろうが、またしても、災害救助の自衛隊である。今度は米軍まで参加するという。それも「そういうシステムの中に何となく米軍も取り入れるような方向で」なし崩し的に、表立ってのことではなく、あくまでも災害救助という形で「何となく米軍も」参加するとい

EU共同体が通貨を統一して、異なる文化を通貨で統一しようとして、いま破綻が見えている。ヨーロッパは地続きだから関税などのルールを統一すれば人も物も全部交流できるとおもったのだろうが、なかなかそうはいかなかった。富めるドイツと貧しいギリシャが浮き彫りにされている。いま日本が参加しようとしているTPPは一種のEU共同体ではないだろうか。関税だけならまだしも、医療や公共福祉の分野まで環太平洋のルールに委ねようというのだから。

農産物に限っていえば、安倍某は「日本の食は守る」とかいつているが、結局、なんとか補償、といいだして、農業者が困らない政策をいっただけのことだろう。まあ、それらはすべて政府が悪い、政治が悪い、なんていつてもはじまらない。

もし、この文明が減びるとしても、減びるまでの期間、日本という国で生きていく人、ひとり一人がどう生きていきたいか、そのことが問われていることでもある。

それ行けドンドンみたいな浮かれ政府から遠く離れて、「わたしはこう生きていく」という、政府や政治や経済から外れた生き方をしていけばいいのだし、そういう人たちが増えればいいとおもう。

そのとき、政府や政治に頼みたいのは援助や補助などはそのままいから「邪魔だけはしないでくれ」ということにつきるような気がしているが、はたして「行け行けドンドン」の先になが待っているのだろうか。

うのである。

おまけにその中国四国防衛局長とやらはこうもいったそうだ。「自衛隊の実力よりも米軍が抜群に上だから、沖縄に米軍のそういう能力の見学会を企画したら、参加者を募集するんで高知県の担当者が参加されたとか、そういうフランクな形で」沖縄の在日米軍の存在を追認せよ、という話もあったようだ。いつもながらのなし崩し的手法だ。一度、前例を作ってしまったら、それが恒久的に生き残るとい手法だ。

高知は災害がおおい。そのたびに自衛隊のヘリコプターや人海作戦で救助してもらっている。だから、自衛隊は「いざ災害」のときに必要だ、という暗黙の了解のようなものがある。しかし、それは違う、とむかしから何度も言いつづけている。

災害時にそういう組織が必要であれば「災害救助隊」のような民間の組織をつくれればいいだけの話である。などといっているのはほくだけかもしれないし、たぶんこのまま自衛隊は災害救助の自己完結型の組織として存続するだろう（安倍某は組織名を変えたいようだ）。

災害救助のたびに、「自衛隊に救われた」と涙する高齢者がTVカメラの前で感謝している映像がなんの疑問もなく流されている。自衛隊は国民の命を守っているのだ、と。

普段、自衛隊の海外派遣がどうの、在日米軍がどうの、オスプレイが県に通知もなく勝手に飛んでいる、と批判的な報道をしているTVや新聞だが、もし在日米軍がオスプレイを持ち込んで孤立集落の高齢者を助け出したらなにもいわないだろうか。それとも敢然と「災害と米軍の演習は別」と論陣

を張るだろうか。

が、まあ、それ以上に、いざ災害のとき、自衛隊の救助を待つメンバーのなかにぼくがいたとしたら、ぼくは恥ずかしくも自衛隊員の背中に負ぶさってしまふのだろうか、それとも、そんな恥ずかしいことをせず、濁流の中に消えていくことを選択するのだろうか。いざそのとき、ぼくはどうするのだろうか。